



村上春樹『回転木馬のデッド・ヒート』試論：
サルトルの受容を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 柯岑 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017295

村上春樹『回転木馬のデッド・ヒート』 試論

—サルトルの受容を中心に—

陳 柯 岑

はじめに

『回転木馬のデッド・ヒート』（八五年一〇月）^{〔1〕}の「はじめに」のなかで村上春樹自身と思われる小説家の「僕」が、ここに収められた文章はすべて「多くの人々から様々な話を聞き、それを文章にした」ものだと述べる。「僕は聞いたままの話を、なるべくその雰囲気壊さないように文章にうつしかえたつもりであり、したがって、これら一連の文章は小説ではなく、「仮にスケッチ

としても呼ぶべきものだと断っている。「僕」は当初「これらのスケッチを活字にしようというつもりはまったくなく、「書斎の机の中」に放り込まれる運命にあったものだが、「三つ四つと書き進んでいるうちに」、「それらは『話してもらいたがっている』ように感じられてきたのだというのである。

小説家の「僕」が、あえてこうした自注を施すのは、「小説で

もノン・フィクション」でもない「現実的なマテリアル」そのものである「他人の話」には、小説にはない「ある種の無力感」、^{〔2〕}「我々はどこにも行けない」という「無力感」が強く感じられるからであり、「現実的なマテリアル」をこうして文章にすることで、この「無力感」を読者に伝えようと考えたからであった。「はじめに」の末尾で、「僕」は次のように書いている。

誰をも抜かないし、誰にも抜かれない。しかしそれでも我々はそんな回転木馬の上で仮想の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげているように見える。

事実というものがあつた場合に奇妙に映るのは、あるいはそのせいかもしれない。我々が意志と称するある種の内在的な力の圧倒的に多くの部分は、その発生と同時に失われてしまっているのに、我々はそれを認めることができず、その空

白が我々の人生の様々な位相に奇妙で不自然な歪みをもたらすのだ。

少なくとも僕はそう考えている。

ここで「僕」は何を言おうとしているのだろうか。まず一見平凡な日常生活がある。「誰をも抜かないし、誰にも抜かれない」ような生活だ。そこにはたしかに「ある種の無力感」が漂っている。多くの人は、このような日常から抜け出したいと考えるだろう。「意志と称するある種の内在的な力」とは、そのような欲望を指していると思われる。そして「内在的」な欲望の大半は、「その発生と同時に失われてしまっているのに、我々はそれを認めることができ」ない。平凡な日常生活への回帰を宿命づけられていながらそこからの飛躍を望むとき、欲望は硬直した物語に転化して人々の生活世界を隠蔽しようとするだろう。「人生の様々な位相に奇妙で不自然な歪みをもたらす」のは、生活世界の延長でしかない人生と、あたかも冒険譚のような物語性とのほごまに、人々が宙づりにされているからである。

生活世界の非物語性に人間が直接向き合うことはほとんどの場合困難だが、「内在的」な欲望を永続的に維持することもまた、極めて難しい。「僕」が「回転木馬」の比喩で表現しているのは、

引くことも押すこともできない「人々の生」の実相なのである。小説家として「僕」がこうしたテーマを抱いた時、彼の近傍には同様の課題を徹底的に問いつけたサルトルの日記体小説『嘔吐』^②があったのではないか。『嘔吐』から引用しよう。

私はこう考えた。最も平凡な出来事が、ひとつの冒険となるには、それを（語り）はじめることが必要であり、それだけで充分である、と。これは人が騙されている事実である。人間はつねに物語の語り手であり、自分の作った物語と他人の作った物語とに取り囲まれて生活している。彼は日常のすべての経験を、これらの物語を通して見る。そして自分の生活を、他人に語るかのように、生活しようと努めるのだ。（中略）

人が生活しているときには、なにことも起りはしない。舞台装置が変わり、人びとが入って来たり、でて行ったりする。ただそれだけだ。決して発端などありはしない。日が日に、わけもわからずつけ加わって行く。それは果てしない単調な加え算だ。ときどき部分的な合計をする。私は三年間旅行をした。ブーヴィルにきて三年になる、などと。結末もまたない。

『嘔吐』の語り手ロカンタンはこのように日記に書き記している。ここから「回転木馬」の「ある種の無力感」、小説にはない「現実的なマテリアル」そのものが帯びる「奇妙で不自然な歪み」の認識まではわずかの距離であろう。『回転木馬のデッド・ヒート』に収められた「嘔吐1979」（八四年一〇月）は、そのことを読者にたいして明示的に表現する意図が作者にあったことをはっきりと示している。

第一章 「嘔吐1979」

村上春樹の短編「嘔吐1979」は、「長い期間にわたって一日も欠かすことなく日記をつけることができるという稀有な能力を身につけた数少ない人間の一人」である「彼」が「四十日間吐きつづけた」という話である。作品の記述のディテールには、実存主義の哲学者サルトルの日記体小説『嘔吐』との照応関係を見出すことができる。作品タイトルも、サルトルの『嘔吐』との関係性を明示するものと考えてよいだろう。邦訳は、二〇一〇年に鈴木道彦による新訳が出されるまで、一九五一年刊行の『サルトル全集』第六卷（人文書院）白井浩司訳で広く読まれた。村上春樹もこの白井訳で「嘔吐」を読んだものと考えられる。

「嘔吐1979」の「彼」は「友だちの恋人や奥さんと寝るのが好き」で、「彼はじつさい、それまでの人生の中で何人もの友だちの恋人や奥さんと寝ていた」と書かれる。「彼はとにかく友だちの恋人や奥さんと寝るといふ行為そのものが好きなのだ」。「彼」はそのような行為の相手になる女性たちについて次のように語る。

彼女たちにとっては相手がある程度までもで、親切で、気がしれていさえすれば、それでオーケーなんです。彼女たちの求めているのは、恋人とか夫婦とかいったステイックな枠組みをこえて、きちんと構ってもらうことなんです。それが基本的原則なんです。

「彼」には「決まった恋人はいない」が、「友人」は多いようだ。「彼」が「友だちの恋人や奥さんと寝る」のは、「彼女たち」が誰かに構ってもらいたいからだ。「彼」は説明する。「彼は」「彼女たち」のそのような願望の「基本原則」にそって行為できる男だという「彼」なりの存在理由を、自己承認することによって受け入れている。「彼女たち」もまた、「彼」のように振舞える男性に構ってもらうことで、「彼女たち」なりの存在理由を見出している。

その意味でここに描かれた特異な行為は、それぞれの存在理由を見出すことの心地良さによって成立しているといえるだろう。しかし、ここに描かれた「彼」と彼女らとの関係性は、互いに深く理解し合い、その人生の全体にまでコミットすることを拒絶するものであることは明らかだ。「1979」年における「彼」の存在理由は、このように極めて希薄である。

サルトルの『嘔吐』の主人公ロカントンは、他人との関係の希薄さにおいて際立っている。一八世紀の虚構の人物ロルボン侯爵について図書館での事跡を図書館の古文書の中から一つ一つ拾い上げるのが彼の日課だ。「私は、ひとりで、完全にひとりで生きている。決してだれとも話をしないし、なにも受けねばなにも与えない」と彼は日記に書き記している。カフェの女主人マダム、フランソワーズとは性的交渉すら持っているが、二人の関係をロカントンは次のように味気なく書き記している。

彼女が一杯のビールをはこんでくるとき、私はたずねる。

「今夜は暇かい」

彼女がいいえと言ったためしはない。私は、時間ぎめかあるいは一日ぎめで彼女が貸している二階の大きな部屋のひとつへ、彼女のあとについて行く。私は金をやらない。私たち

の色事はおあいこなのだ。彼女は歓びを味わう。(彼女には一日にひとりの男が必要だ。だから私以外にも大勢の情人を持つている。) こうして、私にはその原因がわかりすぎているある種の憂鬱から解放されるのだ。しかし私たちは、せいぜい二言か三言を交わすにすぎない。しゃべることがなんの役に立つか。めいめい勝手に生きている。

ロカントンが彼女に「金をやらない」のはこの行為が「おあいこ」だからだという。二人は「めいめい勝手に」情事にふけるのであり、互いにとって情事の相手は、自分の快楽のための道具にすぎない。ロカントンにとって自分自身の存在理由は、「ド・ロルボン氏」の人生を史料によって再現することによって与えられるものと考えられている⁽³⁾。現在を生きるロカントンは、過去によってその生を意味づけられるものと考えているのである。

同じ日の日記にロカントンはこう書き記している。

事物、それが人に(触れる)はずはないだろう。なぜなら、それは生きていないから。(中略) 事物は役に立つが、それ以上のなものでもない。そして、それが私に触れることが、私には耐え難いのだ。まったくそれが生きたけだけの

であるかのように、事物と関係を持つことを私は怖れる。

情事の相手である彼女の存在は、ロカントンにとって次第に「事物」との関係としての相貌を呈し始める。すでにこの時、ロカントンは意味不明の吐き気にしばしば襲われている。その吐き気は彼が「事物」に触れたときにやってくる。

いま、私は思い出す。はつきりと思い出す。いつか私が海辺にいて、あの小石を手にしたときに感じたことを。それは甘ったるい嘔吐のようなものだった。どんなにかそれが不愉快だったろう！

サルトルの『嘔吐』には、この「小石」の記述が四回現れている。ここに引用したのは二回目に「小石」について語られる場面であり、ここで既に「小石」は「嘔吐」と密接にかかわるものとして描かれている。そして三回目に「小石」が語られる時、ロカントンの「嘔吐」感をはじめあらゆる異常な感覚が、「小石」の経験とともに始まったことが自覚的に語られる。

そうだ、私は、世界が存在することを知っている。それだ

けのことだ。しかしそれはどうでもいいことだ。すべてが私にとつてどうでもいいというのは奇妙である。それが私には恐ろしい。これは私が水切りをしようとした、あの忘れられない日以来のことである。私は、あの平たい石を投げようとして、その石を眺めた。すべてが始まったのはその時である。私はその石が〈存在する〉のを感じた。

平井啓之はサルトルの「嘔吐」における「小石」の果たす役割について次のように論じている⁽⁴⁾。

こうしてこの小説の長い線上のディスクールの冒頭に置かれた〈小石〉は、ディスクールのはじまりであるとともに、ディスクールの主題の暗示であり、ほとんど主題そのものの冒頭からの提示であり、それ自体が「嘔吐」であり、「その時以来、他のさまざまな〈嘔吐〉」の体験を重ねながら進行するディスクールの、所要所に姿をみせて、われわれ読者を、「嘔吐」とは裸形の体験であり、偶然性の体験である、というこの小説の主題の全面的開示へと導いてゆくのである。

平井はこのような性格を持つ「小石」を「特権的なシーニュ」と呼び、小説『嘔吐』が「小石」の意味の「習得の物語」、「一種の謎解きのディスクール」となっていると指摘する。確かにロカントンの「嘔吐」感と一対の関係にある「小石」の存在が、マロニエの木の場面に彼を導き、世界の不条理とあらゆるものが無根拠で偶然的の産物であり、何の意味もなく実存しているという事実を彼を直面させる。読者はロカントンとともに、「嘔吐」感の意味を徐々に知ることになるのだ。「小石」とはそのような世界の不条理、無根拠、偶然性の象徴として作中に巧みに配置されているのである。

「嘔吐1979」の「彼」は先述したように「友達の恋人や奥さんと寝るのが好き」で、彼女たちとの交渉によって得られる軽薄な存在理由によって日常を生きている。そのような「彼」に「吐き気」が襲い、四〇日間毎日彼を苦しめる。そればかりか、その四〇日間の吐き気と「ほとんど一致する」期間、毎日未知の男の声で電話がかかってくる。小説はそのような経験を「彼」が小説家の「僕」に語って聞かせるという内容だ。「彼」自身にも「いたずら電話と吐き気がどこで関連しているのか」わからなのまま、「一日も休むことなく」それは続いたと「彼」は語る。「僕」もまた、「彼」の話聞きながら、その原因について「彼」

に質問するのだが、結局「いたずら電話と吐き気」が並行して続く理由はわからないままだ。

サルトルの『嘔吐』において「小石」が、世界が不条理であり、すべてが偶然的の産物であるという認識にロカントンを導くとすれば、「嘔吐1979」における「いたずら電話」もまた、「彼」の名前を告げる男の声が常に「嘔吐」とセットになって到来するという現象として、「嘔吐」の原因を告げ知らせる声の位置にありながら、どこまでも意味を拒絶し続けるという特異な現象として描かれている。「僕」と「彼」は、「嘔吐」と「いたずら電話と吐き気」がどこで関連しているのか」を気にしながら、「さっぱりわからない」という状況だ。「彼」はこの理不尽に訪れる「嘔吐電話」に対して次のように「僕」に語っている。

僕はなんていうか、そういう風な負け方に我慢ならないんです。吐き気とかいたずら電話といったようなわけのわからない理不尽なものに降参して、それで自分の生き方を簡単に変更しちゃうということに対してね。それで僕はとにかく体力と精神力の最後の一滴がしぼりとられちまうまでとにかく闘ってやろうと決心したんです

「彼」はこのように「決心」し、「嘔吐」と「いたずら電話」から逃げない生活を選び取る。体重は「嘔吐」のために大幅に減るが、スリムになった体型に合わせ洋服を新調する。「いたずら電話」にも「録音電話」で回避することはせず、必ず自分で電話を取る。こうした「彼」の姿勢には、「わけのわからない理不尽なもの」に対して、「彼」自身の存在根拠をゆるぎないものとして対置させようとする主体的な決断を見ることが出来る。

見逃すことができないのは、「彼」は主体的にこの「わけのわからない理不尽なもの」と向き合いそれを排除し得たことで、最終的に「彼」が勝利したと「彼」自身が考えているということである。七月一四日の電話を最後に、「ヒッチコックの『鳥』みたいに朝になってドアを開けたら、もう何もかも過ぎ去っていたんです。吐き気もいたずら電話も、もう何もかも過ぎ去っていたんです」と「彼」は「僕」に語る。「彼」は「自分の生き方」が「わけのわからない理不尽なもの」を排除したことで、自分の「体力と精神力」の勝利を確信し、「自分の生き方」の正しさを確認する。「彼」が小説家の「僕」に語ろうとするのは、「彼」自身の存在根拠の必然性が、理不尽さと偶然性を排除し勝利するという物語なのである。

だが「僕」の次のような語りかけによって、「彼」の意味に満

ちた「生き方」の必然性は揺らぎ始める。

たぶん愛想が付きたんだろう。あるいは探偵をやといつづけるだけの金がつきたのかもしれない。どちらにせよ、これは仮説だからね。仮説でいいんなら、百だって二百だってひっぱりだせるさ。問題は君がどの仮説をとるかかってことなんだ。それから、そこから何を学ぶかってことだな

「嘔吐電話」の理由は、仮説としてなら無数に考え得る。だが「僕」は「嘔吐電話」に理由がなければならぬとは考えていない。「彼」の「生き方」の正しさが「嘔吐電話」の理不尽さを排除したのではなく、「理由なく始まったものは理由なく終わる。逆もまた真なり」という、ただそれだけのことなのだ。

「彼」は「僕」の「何を学ぶか」という言葉に敏感に反応する。「彼」にとって「嘔吐電話」は単に「わけのわからない理不尽なもの」に過ぎず、それを打ち負かした現在、「嘔吐電話」の理由についての仮説から何かを学ぶという「僕」の言葉には、了解し兼ねるものがあるのだ。

「学ぶ？」と彼は意外そうにそう言った。そしてしばらく

額にグラスの底をつけていた。「学ぶって、どういうことですか?」

「もう一度それがやってきたらどうするかってことだよ、もちろん。この次は四〇日じゃ済まないかもしれないぜ。理由なく始まったものは理由なく終わる。逆もまた真なり」

「嫌なことを言いますね」と彼はくすくす笑いながら言った。それから真顔にかえった。

「しかし妙だな。あなたに言われるまで、それについて一度も考えてみたことがなかった。その……もう一回あれが来るかもしれないってことをね。ねえ、ほんとうに来ると思いますか?」

「そんなことわかるわけないさ」と僕は言った。

サルトルの『嘔吐』は、主人公ロカンタンを襲う度重なる吐き気の体験を経て、ついに吐き気の根本原因である存在の不条理性ないしは偶然性に突き当たるといふ道筋が大きなモチーフをなしている。他方、「嘔吐1979」の「彼」は「わけのわからない理不尽なもの」の突然の消滅によって、「自分の生き方」の正しさと必然性を確認する。ここまでのところで言うならば、「彼」はロカンタンの対極の道を進んでいるといえる。しかし、右の引

用の場面で、小説家の「僕」は「彼」の「自分の生き方」と「嘔吐電話」の消滅とは何の関係もないと考えている。「嘔吐電話」は何の理由もなく「彼」を襲い、何の理由もなく消え去ったのに過ぎない。そこにあるのは、あのマロニエの木の根をめぐる考察によってロカンタンが到達した、世界の偶然性という事実である。「彼」は「嘔吐電話」の「わけのわからない理不尽」さに勝利したわけではなく、「もう一度それがやってきたらどうするか」を考えておくべきだと「僕」は言うのである。「彼」にとつて真に驚きであったのは、「僕」のこのような認識に他ならなかったと言うべきだ。「しかし妙だな。あなたに言われるまで、それについて一度も考えてみたことがなかった。」という「彼」の反応がそのことを如実に示している。

「彼」は最後になった七月一日の電話を受けたときに、世界の不条理や偶然性に突き当たるべきであったと言えよう。その時点で「彼」がそのような道筋を歩まず、相変わらず「自分の生き方」の正しさと必然性を信じていたという点が、サルトルの『嘔吐』との最も大きな違いであり、「嘔吐1979」と題されることの意味でもあろう。七月一日の「最後の電話だけはいつもと違っていました」と彼は言う。

最後の電話だけはいつもと違っていました。まず相手が僕の名前を言いました。これはいつもと同じです。でもそれから奴はこう言ったんです。「私が誰だかわかりますか?」つてね。そしてしばらく黙っていました。僕も黙っていました。十秒か十五秒くらいだと思うんだけど、どちらもひとことも口をききませんでした。それから電話が切れました。

「まるで覚えがない」男の声は、「彼」の名前を知っているが、「彼」は男の名前を知らない。電話の声は、その事実を「彼」に突き付けるものだ。このことを次のように考えることができるだろう。「彼」は不条理で偶然そのものである世界を、一つの「仮説」によって切り取り、その世界の閉鎖系の中で生きている。しかし、「僕」が言う通り、「仮説でいいのなら、百だつて二百だつてひっぱりだせる」のであり、この不条理な世界を理路整然と説明する方法は、実は無数にある。ただその中からどの体系を選ぶか、どの一つの体系の中に生きるかだけが人生の意味を具体的に決定する。

「彼」と電話の男との非対称性は、両者の生きる世界の異なりに対応している。あるいは、「彼」の生きる世界が無数の可能世界の中の一つにすぎず、「彼」がこの世界の不条理な偶然性に真

に直面し、世界を総体として把握することは不可能だということを示している。サルトルの主人公ロカントンは、まさにその可能性をありありと認識したことによって、自分の過去の一切が無意味であるという認識に至る。

もはやいかなる生きる理由も私には残っていない、私の模索した生きるための理由はすべて画餅に帰した、そして他の理由をもはや想像することができない、ということである。(中略) 私の過去は死んだ。ド・ロルボン氏は死んだ。アニーは戻ってきたが、それは私からあらゆる希望を剥奪するためだった。庭々に沿って走っているこの白っぽい道に私はひとりである。ひとりであり自由である。けれどもこの自由はいささか死に似ている。

ロルボン侯爵の事績を調べ、過去の再現によって現在の生を意味づけようとするロカントンの欲望は、いまや意味のないものとなった。ロカントンの人生はこの不条理な偶然性の世界に取り巻かれており、しかも無数の意味の体系によってこの世界を意味づける「自由」を与えられているが、どれか一つの意味の体系を選び取ることは、他の可能世界の全てから遮断されるばかりでなく、

この世界の不条理な偶然性からも切り離されることになる。「この自由はいささか死に似ている」のだ。

「嘔吐1979」の「彼」に突然訪れた「嘔吐電話」は、この不条理な世界からの呼びかけだったといえるだろう。「彼」が戦い勝利したと考えた「わけのわからない理不尽なもの」は、「彼の認識とは係わりなく、何度でも「彼」に訪れるかもしれないし、むしろもう二度とやってこないかもしれない。それは「彼」が勝利したからではなく、「わけのわからない理不尽なもの」とは元来そういうものなのだからだ。

「彼」はこの世界を意志と主体性によって切り開き、自分自身の存在理由を打ち立てようと考え、いわば普通の人間である。だがロカントンは次のように語っている。

私は一回戦に負けた。二回戦には勝とうと思ったがそれにも負けた。そして結局勝負を失ってしまったのである。同時に私は、だれもがつねに失うものであることを学んだ。ろくでなしだけが、勝つと思っている。

「ろくでなし」こそ、一九七九年の普通の人間であろう。ロカントンはロルボン侯爵の研究によって自分の人生に存在根拠を与

えられると考えていた。これが一回めの敗戦である。そしてかつての恋人アニーとの再会によって、自分の人生を必然的なものが高めようと考えたが、これも二回目の敗戦に終わったのであった。「だれもがつねに失うものであることを学んだ」ロカントンが最終的に立つ地点は、戦いそのものを放棄した地点、すなわち世界の不条理な偶然性の只中で、なにもものをも選択しないという立場である。

「嘔吐1979」が最終的に示しているのは、いつやって来るともわからない「わけのわからない理不尽なもの」に人間は常に取りまかれていることを知らなければならぬという事である。最後の「嘔吐電話」で男の声が「私が誰だかわかりますか？」と問うのは、その声の主が世界のどこかにいることを示しつつ、それが特定のどこかではなく、どこでもあり得ること、特定の誰かではなく、誰でもありうるという事を示している。「彼」は得体的にしないその声の主に、取りまかれているのである。

ロカントンは公園のマロニエの根を見つめ、公園全体の存在の不条理性に気付かされる。

存在はふいにヴェールを剥がれた。それは、抽象的範疇に属する無害な様態を失った。存在とは、事物の捏粉そのもの

であつて、この樹の根は存在の中で握られていた。と言うか、あるいはむしろ、根も、公園の柵も、ベンチも、貧弱な芝生も、すべてが消え失せた。事物の多様性、その個性は単なる仮象、単なる漆にすぎなかつた。その漆が溶けた。そして怪物染みた、軟くて無秩序の塊が——恐ろしい淫猥な裸形の塊だけが残つた。

「根も、公園の柵も、ベンチも、貧弱な芝生も」、それら個々の事物は存在の仮象であつて、実は「怪物染みた、軟くて無秩序の塊」、「恐ろしい淫猥な裸形の塊」であるとロカンタンは言う。

存在とは遠くから考えられるなにかではない。それは人をついに襲い、人の上で止まり、肥つた動かないけどもののように人の心にのしかかる——と思う間に、もはやなにひとつない、というものでなければならぬ。

「嘔吐電話」の声の主は、このように描かれている「存在」そのものであり、ふいに「彼」を襲い、四〇日に及ぶ間彼に「のしかか」り、ロカンタンと同様「彼」を吐き気と嘔吐で苦しめた挙句、突然「彼」のもとから消え去る、そのような「存在」そのもの

のであるといえるだろう。

第二章 「野球場」

『回転木馬のデッド・ヒート』に収められた「野球場」（八四年六月）は、小説家の「僕」が「原稿用紙にして七十枚ばかりの小説」を「僕のところへ小包で送り届けてきた」青年と、その後直接会い、そこで「彼」が語つた「変な体験」を中心に展開する「スケッチ」である。「彼」が送つてきた小説には、シンガポールに旅行した「二十五歳の独身のサラリーマン」と彼の恋人の二人が、「蟹料理専門のレストラン」で「たらふく蟹料理を食べた」夜、ホテルに戻つた二人の内、「彼」だけが「ひどく気分が悪くなつて、便所で吐いた」という場面が描かれている。小説は「彼」の体内から吐き出される蟹の肉片の奇妙な生々しさを中心に、その肉片から「蟹の肉と同じ色をした白い微小な虫が、何十匹と、肉の表面に浮いていた」というグロテスクな描写と、同じ料理を食べながら、恋人の彼女には異変がなく、「彼」だけにそれが発生した奇妙さの感覚が描かれている。

この小説を書いた「彼」は、これらのがすべて事実であり「本当にあつたことです」と「僕」に語る。「彼」自身も「変な体

「喉」と言っているように、嘔吐と「蟹の肉と同じ色をした白い微小な虫」という出来事には、現象それ自体の生々しい気味悪さ以外、現象の原因も、現象がもたらした結果らしいものも特に何も描かれていない。「彼」に突然訪れた嘔吐とその吐瀉物の気味悪さのリアリティだけが際立つ作品なのである。

よく知られているように、サルトルは蟹を特別気持ち悪いものとして嫌っていた。そのことは小説『嘔吐』の次の一説に描かれたような形で姿を現している。

窓ガラス越しにみんなが私を眺めているのだ。私もまた、彼らのようであり、人間であるとみんなは信じていた。ところが、私は彼らを欺いていた。一挙にして私は人間の外観を失った。そして彼らは、非常に人間的なこの部屋から、後ずさりして逃げていった一匹の蟹を見たのだ。いま、仮面を剥がれた闖入者は逃亡した。集会は継続される。人々の眼とろたえた思考とのざわめきを背に感じると、いらいらしてくる。

ロカンタンが毎日通う図書館に「独学者」と呼ばれアルファベット順に本を読んでいる男と、ある日レストランで昼食を共に

することになるが、熱心にヒューマニズム論を説くこの「独学者」の話の聞かされているうちに、ロカンタンは激しい嫌悪感を覚えはじめ、かつてないほどの強い吐き気の発作に襲われる⁵⁰。彼は、握り締めていたデザート用のナイフをさらに投げ出し、錯乱した状況のなかで「一匹の蟹」となり、「人間的なこの部屋から、後ずさり」しながら逃げるように飛び出していく場面である。

この時ロカンタンはレストランに居合わせたすべての人の厳しいまなざしが彼に注がれていることを認識しており、「後ずさり」する彼の顔は、人々の眼差しと正面から対峙している形である。一方、「野球場」の「彼」が書いた小説には、蟹の肉片を吐き出した「彼」を見つめる人はおらず、恋人の彼女もベッドで眠っている。小説家の「僕」がこの原稿を読み「その作品の小説としての魅力はずっと低いものだった」と感じるのには、あるいは、『嘔吐』のこの場面に描かれたまなざしの対峙する緊迫感の欠如もその一つの要因であったのではないか。そのような推測をあえて行うのは、「野球場」という作品の中心部分をなしている「彼」の体験談の中心テーマがまさにこのまなざしの問題に置かれているからだ。

「嘔吐1979」に描かれた「嘔吐電話」の声の主は、毎回「彼」の名前を告げ、最後の電話で「私が誰だかわかりますか？」

と一方的に問いかけて電話を切っている。この男と「彼」との関係もまた、まなざしの問題と深くかかわっている。「野球場」の「彼」は、「その頃ある女の子に夢中になって」いて、「彼女の生活を徹底的にチェックしてやろう」と考え、彼女のアパートから野球場を挟んで、「外野のフェンス」沿いに建つアパートの二階に引越すことにする。「父親にたのんでとびきり大きいカメラの望遠レンズを借りて」、「彼女のアパートの部屋が見えるようにセツト」した。

彼女は自分の生活が誰かにのぞかれているなんて、思いもかけないようでした。まったく僕の狙いどおりでした。夜になると彼女はいちおうレースのカーテンをひきましたが、そんなものの部屋の中に明かりがついてりゃ何の役にも立ちやしません。それで僕は心ゆくまで彼女の生活ぶりや、それから体なんかを眺めることができました

ここにもまなざしが描かれており、それは「嘔吐1979」と同様、一方的に対象に差し向けられるまなざしである。いずれも、まなざしを対象に向けて一方的に差し向ける構造であり、「嘔吐1979」の「彼」はそのようなまなざし（実際には一方的な電

話）に四〇日間晒されることの苦痛を「嘔吐」によって体験する。「野球場」ではこれと逆に、まなざしを差し向ける「彼」と「まなざし」の先に見えるものとの関係性の緊張をはらんだ変化を描き出しているといえるだろう。

サルトルは『存在と無』第二卷（松浪信三郎訳）第三章に「まなざし」という節を設けて、次のような印象的な文学的イメージを用いてこのまなざしの問題について考察している。

かりに、私が、嫉妬にかられて、興味にさそわれて、あるいは悪癖にそそのかされて、扉にびったりと耳を当てがい、鍵孔から中を覗いている場面を、想像してみよう。(6)

この場合、「覗いている」男は「鍵孔」という道具を使い、扉の向こうの存在と自分を「いかにして連関させるか」という一点に意識を集中し、「インクを吸取紙にしみこませるように私を諸事物のなかに吸い込ませる」こと、「私を世界の中に消失させる」ことに自分の全存在を集中する。サルトルはこの状態にある男の存在を即自存在として定位する一方で、自分が覗き見や盗み聞きをしているという意識を持つとき、「私は、私を、「真に、扉のところまで盗み聞きをしつつあるもの」として定義することさえ

できない」と述べて、対自存在の「自己欺瞞」について論述を進める。

「嘔吐1979」の「嘔吐電話」の声の主は即自存在として「彼」の前に現前し、彼を「嘔吐」させる存在である。サルトルにとつて即自存在は、神の理性や神の意志が消え去ったとき、なんの根拠も理由もなく醜怪で不気味なものとしてただそこにある、あり続ける存在である。即自存在だけでなく、他者のまなごしもまた醜怪で不気味なものとして現れる。先の引用部分から始まる即自・対自存在の考察に続けて、次のようにサルトルは書いている。

ところが、突然、廊下で足音のするのが聞こえた。誰かが私にまなごしを向けている。このことは、何を意味するのだろうか？ それはこうである。私は、突然、私の存在において襲われる。本質的な変容が私の構造のうちにあらわれる。(中略) 他者のまなごしを私に顕示し、このまなごしの末端において私自身を顕示するのは、羞恥もしくは自負である。また、私をして、「まなごしを向けられている者」の状況を、認識させるのではなく、生きさせるのは、羞恥もしくは自負である。(中略) 羞恥は、「私は、まさに、他者がまなごしを向けて判

断しているこの対象である」ということの承認である。(中略) しかも、私は、他者が私から奪って他有化した一つの世界のうちにおいて、私がそれであるところの「この私」である。

即自存在と対自存在に分裂している人間存在は、このように他者のまなごしの尖端においてさらに「他有化」される。この「他有化」の状態にある自己を承認することが「羞恥」に他ならない。他者とともに生きる限り、そして意識を有している限りにおいて人間は、「羞恥」から解放されることはない。他者との関係の展開は、「羞恥」を深めるように進むのである。サルトルは人間存在のこうした性格を「対他存在」と呼ぶ。

さて、「野球場」の「彼」は「彼女」の生活を覗き見る生活が続けるうちに、ことで一つの変化を自覚する。

女の子の生活を逐一眺めるっていうのは本当に変なものでした。(中略) そういうことは一緒に顔をつきあわせて暮らしているのだんだん馴れてくることなのかもしれません。でもそれが唐突に拡大されたフレームの中にとびこんでくると、それは相当にグロテスクなものです。(中略) そうい

のを見てみると、哀しくって、息苦しいんです。

ここで「彼」が「グロテスク」と表現していることに注意したい。具体的にそれは「彼女の生活ぶりや、それから体なんか」のことを指しているが、「唐突に拡大されたフレームの中にとびこんでくる」それらを見続けていることで、「彼女」の身体が醜怪で不気味な物それ自体として「彼」に迫ってくるように思えるというのである。「彼」はサルトルが語る「鍵孔」から覗き見する男そのものであり、最初のうち「彼」は「インクを吸取紙にしみこませるように私を諸事物のなかに吸い込ませる」こと、「私を世界のなかに消失させる」ことに自分の全存在を集中する。しかし、自分自身を醜怪な即自存在に留め置き、「彼女の生活ぶりや、それから体なんか」を拡大して見続けているうちに、「彼女」の身体の醜怪さが顕現する。

「哀しくって、息苦しい」と感じ始めた「彼」は、「もうこういふことはやめよう」と決心した」という。「彼女の生活ぶりや、それから体なんか」が「グロテスク」な相貌をさらけ出し、「彼女」を覗き見し所有したいという欲望にとらわれていた「彼」は、ようやく我に返る。すなわち、「彼」は覗き見をしている自分を対目的に意識し、自分の行為を相対化する。覗き見する自分とそ

の自分を意識している自分に「彼」が分裂することで、「望遠レンズをカメラからはずして、三脚といっしょに押入れに放り込」む「彼」に変容するのである。

「彼女」が「グロテスク」な存在の相貌でカメラのレンズを通して「彼」を脅かすのは、マロニエの木の前でその奇妙に歪んだ根を見つめているロカンタンを吐き気が襲うのと同じ関係である。「哀しくって、息苦しい」と感じる「彼」は、覗き見されている「彼女」の方から逆に覗かれ、圧倒されているといっている。「彼」は今、この「彼女」のままざしによって「他有化」されているといえるだろう。

しかし事態はここからさらに変化する。「彼」は「もう彼女の生活をのぞかないでいることはできなくなっていたから」である。

僕の体の中にはそれを拡大して切り刻んでしまいたいという欲望がどんどん大きくなっていくのがわかりました。そして、それを抑えきることは僕の意志の力では不可能でした。ちよど口の中で舌がどんどんふくらんで、しまいには窒息してしまふのと同じような感じです。それはなんとはいえないのか、セクシュアルな感情であり、それと同時に非セク

シユアルな感情なんです。まるで液体みたいに僕の中の暴力性が毛穴から浸みだしてくるようなそんなかんじなんです。そういうものを止めることはたぶん誰にもできないんじゃないかと思えます。そんな暴力性が僕の体の中にひそんでいたなんてそれまで僕自身にも認識できなかったんです。

「押入れの中からまたカメラと望遠レンズと三脚をひっぱりだして前と同じようにセットし、彼女の部屋を眺めつづけ」ることになった「彼」を支配しているのは、「彼女」の体を「切り刻んでしまいたいという欲求」であり、「彼」自身にも認識されたことのない「彼」の内にある「暴力性」である。

「彼」は「液体みたい」な自分自身の「暴力性」に抗うことができない。「セクシユアルな感情」であり、それと同時に非セクシユアルな感情」でもあるという「彼」の説明は、サルトルの理解するサディズムに対応している。

『存在と無』第二巻「第三章 他者に対する第二の態度―無関心、欲望、憎悪、サディズム」には、次のような記述がある。

われわれは、身体を単なる物質的対象として欲望するのはない。事実、単なる物質的対象は、状況の内に存在するの

ではない。それゆえ、この欲望に対して直接現前しているこの有機的全体は、それが単に生命を顕示するかぎりにおいてばかりでなく、それに適応した意識をも顕示するかぎりにおいてしか、欲望されうるものではない。(中略)なるほど、われわれは、眠っている一人の女を欲望することができ。けれども、それは、この眠りが意識を背景としてあらわれるかぎりにおいてである。それゆえ、意識は、依然としてつねに、欲望されている身体の地平線上にある。意識は、欲望されている身体の意味をなしており、その統一をなしている。

右の記述の横に、「野球場」の次の記述を並べてみると、相互の記述の対照性に気づかされるであろう。

つまりこういうことです。僕の望遠レンズの中で、彼女はふたつに分かれるんです。彼女の体と彼女の行為にです。もちろん通常の世界では体が動くことによって行為が生じます。そうですね？でも拡大された世界ではそうじゃないんです。彼女の体は彼女の体であり、彼女の行為は彼女の行為です。じつと見ていると、彼女の体はただ単にそこにあり、彼女の行為はそのフレームの外側からやってくるような気が

してくるんです。そうすると彼女とはいったい何か、と考えはじめるんです。行為が彼女なのか、あるいは体が彼女なのか？そしてそのまん中がすっぽり欠落しちゃうんです。それにはつきり言って、体から見ても行為から見ても、そういう風に断片的に見ている限り人間存在というのは決して魅力的なものではありません。

「望遠レンズ」のフレームには「彼女の体」の一部が拡大されて見えている。しかしその「彼女の体」は眠っているのでない限り、「行為」のさなかにあるだろう。「望遠レンズの中」には拡大された「彼女の体」の一部分が見えており、「彼女の行為」はフレームの外にあって、「フレームの外側からやってくる」ものとしてある。「彼」がこだわるのは、「彼女」を構成するのは「体」と「行為」の二つのように思えるが、しかしその二つの間には大きな「欠落」があつて、その「欠落」を補わなければ「人間存在」への欲望は喚起されないということなのである。

『存在と無』は、「まん中がすっぽり欠落しちゃうんです」という「野球場」の表現について、明確にその「欠落」を「欲望さされている身体の意味をなしており、その統一をなしている」ところの「意識」だとする。すなわち「野球場」における「彼女の体

と彼女の行為」が、『存在と無』での「物質的対象」と「有機的全体」に対応しており、『存在と無』において、この両者を「身体」において「統一」しているものとして「意識」が定位され、「欲望される身体」はこの「意識」による統一によってはじめて「意味」を持つとされるのである。「体から見ても行為から見ても、そういう風に断片的に見ている限り人間存在というのは決して魅力的なものではありません」という記述は、「意識」を覗き見ることができない「彼」に訪れる欲望の挫折である。

『存在と無』において「サディズム」は、「暴力によって」他者の身体的統一を、単なる肉体として扱おうとする倒錯した欲望だと述べる。性的欲望の対象が「意識」によって「統一」された「身体」でなければならぬとすれば、「サディズム」は「身体」を「受肉させる」こと、すなわち単なる肉体として扱うことで、「欲望される身体」を失う行為でもあるということだ。典型的な例として、『存在と無』では、「サディストがその犠牲者からのまなざしを向けられるとき」を挙げ、「いいかえれば、サディストが他人の自由の内における自分の存在の絶対的な他有化を体験するとき、彼は自分の誤謬を発見する」という。

「野球場」の「彼」は、夏休みになり「彼女」が実家に帰省してしまつたことがきっかけで、「胃がむかむかとして、何も考え

ることが」できなくなるほど「惨め」な思いをする。だが他方で、「でもそれと同時に、僕は心の底からホッと」たと語る。「だんだんもとの僕に戻り、「一夏中」試験勉強もした「彼」は、「九月になって、僕は学校の図書館でばったり彼女と出会」う。「存在と無」に記述された「サディストがその犠牲者からのまなざしを向けられるとき」がやってきたのである。

それから我々は少し立ち話をしました。誰がどうしてるとかこうしてるとかいった他愛のない話です。そのあいだ僕は彼女の右わき腹にあるあざのことを考えていました。それからびったりとした服を着るときに大きなガードルでおなかと尻を締めつけていることを考えていました。(中略) そんな具合に我々は別れました。僕は汗ぐっしりになっていました。しばらくは水たまりができるくらい服はぐしょぬれになっていました。とてもねばねばとして、嫌な匂いのする汗でした。

この「とてもねばねばとして、嫌な匂いのする汗」という特徴的な表現から窺えるのは、「彼女」のまなざしを向けられ、「彼女」に友人らしい声を掛けられることで、かえって際立つことになる

「彼」の存在が発する臭気、覗き見することを欲望したこの肉体の存在の過剰さといったものに対する「彼」自身の嫌悪である。ここで『嘔吐』に描かれた次の一節を思い浮かべることには意味があるだろう。

赤裸々な〈世界〉は、かくて一挙に姿を現した。そして私は、この無意味な嵩ばった存在に対する怒りで、いきが詰まりそうになった。(中略) 私は叫んだ、「なんて汚いんだ、なんて汚いんだ」そして私は、このべとべとした汚物をふり払うためにからだを揺すった。しかし汚物は、しっかりとくっついて離れなかった。

サルトルが即自存在すなわち「赤裸々な〈世界〉」を意識するときの嫌悪感を「ねばねば」、「べとべと」といったオノマトペで表現することは良く知られている。ロカンタンはここで存在理由もなく存在する世界の過剰さに対して「なんて汚いんだ」と叫ぶ。この嫌悪感は、「野球場」の「彼」においては「彼女」のまなざしに晒されることで浮き上がる「彼」の即自存在すなわち赤裸々な肉体に向けられるであろう。

サルトルの『存在と無』の翻訳者である松浪信三郎は、『嘔吐』

の上掲の箇所を引用しつつ次のように解説している。(7)

これが、存在というこの最高の超越者に対してサルトルのあたえた規定である。そしてこれが、『嘔吐』の主人公の存在体験である。存在は、サルトルにとっては、無意味なもの、余計なもの、けがらわしいもの、嘔吐を催おさせるものである。(『実存主義』)

人間はしかし、肉体の過剰さを抱えながらその不可避性を意識する。実存とはこの意識を内包することで対自・即自の二つに分裂した存在を指すのであり、『嘔吐』のロカンタン、そして「野球場」の「彼」もそのような実存として、自分をも含めた世界の存在の理由のない過剰さに向き合い、嘔吐を催すような激しい嫌悪感を抱くのである。作品の末尾で「彼」は次のように小説家の「僕」に言う。

僕は今でも彼女と最後に話をしたときのあの汗のねばねばとした感触と嫌な臭いをはっきりと覚えています。そしてああいう汗だけはこの先二度とかきたくないと思っっているんです。もしそれが可能であるなら、ということですがね

「野球場」という作品が最終的に描こうとしているのは、女性の部屋を覗き見した男がその後には味わうことになる後悔や自己嫌悪といったものではない。それらはあくまで心理的なものであり、主観内部での出来事に過ぎない。「もしそれが可能であるなら」と「彼」が言うように、他者のまなざしによって他有化された自分は、主観的な操作によっては動かし方がない。他有化されることで意識に対して剥き出しになる即自存在としての自己から逃げ出すことは、不可能なのである。その意味で、この作品は「汗のねばねばとした感触と嫌な臭い」を発するグロテスクな人間存在とそれを避けることができない人間の意識との関係を描き出そうとしたものといえるのである。

第三章 「プールサイド」

「野球場」の「彼」は覗き見の経験を振り返ってこう「僕」に語っている。

うまく説明できないんですが、のぞき見をすることによって、人は分裂的な傾向に陥るんじゃないかと僕は思うんです。あるいは拡大することによってと言った方が良いでしょう

ませんけれどね。

この後に続けて「彼」は、「彼女の体」と「彼女の行為」とが分離して「彼女がふたつに分かれる」という話をするのだが、「彼」がそのように感じた直接の原因が覗き見そのものではなく、「拡大」して人体を見ることがあると語るこの場面は、サルトルの小説『嘔吐』の次の場面を想起させる。ロルボン侯爵について調べているロカンタンが、過去の史料の意味を確定することに疲れ、ふと鏡の中の自分の顔を覗き込む場面である。

たびたび今日のように無駄に終わった日に、私はじつと自分の顔を眺めて時を過ごす。私にはこの顔がちつともわからない。他人の顔はひとつの意味を持っているが、私の顔にはそれがない。私の顔が美しいか醜いかを、決めることさえできない。

ここにも肉体の一部としての「顔」と、表情が持つ「意味」との分離が語られている。ロカンタンには、自分の「顔」の美醜さえ感じられない。ただ単にそこにあるだけの肉体の一部に過ぎないのである。さらにロカンタンは鏡に顔を近づける。

私は全身の重みをかけて陶製の縁に凭りかかり、顔を鏡に触れるまで近づける。眼、鼻、口は見えなくなった。人間らしいものはもうなにも残っていない。唇の熱っぽい膨らみの両側にある褐色の皺、亀裂、もぐら塚。絹のような白い産毛が、頬の大きな坂の上を走っている。二本の毛が鼻孔からでている。それは浮彫にした地図だ。しかしとにかく、この月の世界は私には珍しいものではない。細部は〈見馴れたものである〉と言うことはできないが、全体は、かつて見たものという印象を私に抱かせる。そしてその印象が私の心を麻痺させ、私は静かに眠りへと落ちて行く。

ロカンタンはここで自分の「顔」を拡大して見ている。まるで月面の凹凸を眺めるように、顔面の起伏を拡大する。そこに見える世界は〈見馴れたもの〉とは言い難い世界だ。それは無意味そのものともいえる「月」の世界だ。だが「全体」を大きく視野に取めるとそれは見覚えのある世界に戻る。それは意味に満ちた世界だが、ロカンタンはその意味を虚偽の「印象」と捉えている。その「印象」に取りまかれることで彼の心は「麻痺」するのである。『嘔吐』に描かれたこの場面は、自己の肉体を見るという行為を通じて、即自的存在としてただそこにあるに過ぎない肉体の

次元と、意味を帯びた身体性の次元とが意識の内部で分離する体験を描くものである。

だがさらに重要なことは、そのような身体の分離を意識する、その意識を肉体の内に抱え込む存在こそ、人間という対自存在だということであろう。『回転木馬のデッド・ヒート』には、そのような意識の覚醒によって意味の被膜の向こう側にある存在の無根拠性、偶然性に気づかされるといって、一種の発見体験が描かれたものが多いことに気づかされる。「嘔吐1979」には、世界の無根拠性、偶然性の表れとして「嘔吐電話」が描かれ、「彼」はその電話の声の主に呼びかけられるという体験をしている。そして「野球場」の「彼」が「彼女」から声をかけられ、「彼女」のまなざしの下に晒されたとき、「彼」の全身から湧き出してきた「水たまりができるぐらい」の汗は、「彼」にとって自分の主観では否定しようのない彼自身の即自的存在から発したものであった。いかにそれが「ねばねばとした感触と嫌な臭い」を伴うものであっても、それこそが「彼女」のまなざしによっても奪われることのない、「彼」の存在そのものなのである。

こうした一種の発見体験が『回転木馬のデッド・ヒート』所収の各篇において、様々な角度から、様々な状況の中で描かれているらしいのである。所収作品の中で最も発表時期が早い「プール

サイド」(八三年一〇月)には三五才の誕生日に「自分が既に人生の折りかえし点を曲がつてしまったことを確認した」男のことが描かれている。「彼」は三五才の誕生日の翌日、「いつものように近所の散歩にはでかけず、脱衣室」の壁についた等身大の鏡の前に生まれたままの姿で立ち、「まず髪、それから顔の肌、歯、顎、手、腹、脇腹、ペニス、睾丸、太股、足」と「時間をかけて」一つ一つの部位を拡大鏡を覗くようにしながら、「不思議な感動をもって」眺めた。

しかし彼の注意深い目は自らの体をゆっくりと覆っていく宿命的な老いの影を見逃しはしなかった。頭の中のチェックリストにはつきりと刻み込まれたプラスとマイナスのバランス・シートが何よりも雄弁にその事実を物語っていた。どれだけ他人の目をごまかせても、自分自身をごまかして生きていくわけにはいかない。／俺は老いているのだ。／これは動かしがたい事実だった。

「不思議な感動」とはこの「動かしがたい事実」の発見を指している。そして「彼」は三五才までの人生を振り返り、「これ以上の何を求めればいいのか」わからないほど申し分のない人生

だったと考える。「やりがいのある仕事と高い年収と幸せな家庭と若い恋人と頑丈な体と緑色のMGとクラシック・レコードのコレクション」を持つ「彼」は「求めたものの多くを手に入れ」てきたのだ。

何ひとつとして申しぶんはない。しかし気がついた時、彼は泣いていた。両方の目から熱い涙が次から次へとこぼれ落ちていた。涙は彼の頬をつたって下に落ち、ソファアのクッションにしみを作った。どうして自分が泣いているのか、彼には理解できなかつた。泣く理由なんて何ひとつないはずだった。

「彼」は仕事も私生活も自分の身体のケアも、実に丁寧な点検し、意のままにコントロールして生きてきた。「すべてが彼の計算とおりだった」というのも誇張ではない。「もうそれほど若くはない、と彼がはじめて、認識したのは結婚して二年目の春」だったが、徹底的に身体のケアを施すことでその流れに抵抗してきた。だが、三五才の誕生日を境に、「彼」は単なる老いとは異なるある「もの」が自分の体にあることに気付く。「彼」が小説家の「僕」に話をしようと考えたのは、このある「もの」の発見

体験を聴いて欲しいと考えたからであった。

そのある「もの」について「彼」は次のように「僕」に語っている。

「年老いることは自体は正直に言って、僕にとつてはそれほどの恐怖というわけでもないんだ。さっきも言ったようにね。それに抗いたいものに対して抗いつづけるというのは僕の性分にあつている。だからそんなのは辛くもないし、苦痛でもない」と彼は僕に言った。「僕にとつていちばん問題なのは、もつと漠然としたものなんだ。そこにあることがわかつていても、きちんと直面して闘うことのできないもの。そういうものことだよ」

「そういうものを、何かしら感じるといふこと？」と僕は訊ねてみた。

彼は肯いた。「たぶんそういうことだと思う」と彼は言った。

老いるにつれて肉体が変化する事実に対しては「辛くもないし、苦痛でもない」と「彼」は言う。「彼」が本当に「恐怖」するのは直面することも闘うこともできないある「もの」が自分の中にあるということだと言う。松浪信三郎は前掲『実存主義』の

中で次のように書いている。

人間は、絶望的に、神であろうと企てる実存者である。人間は、自分で存在を根拠づけるために、また不在の価値を永遠のかなたにおいてめざすために、あえて自己を失うことを企てる限りにおいて、一つの受難である。(中略)無化の無化としての死が、人間を待ちうけている。死は不条理にも、対自を永久に単なる即自へと変化させることによって、人間の不遜な企てを挫折させる。

「プールサイド」の「彼」は、いわば「神であろうと企てる実存者」である。だがその「不遜な企て」も「死」に打ち勝つことは不可能だ。「彼」が語る通り、「死」は「そこにあることがわかっていても、きちんと直面して闘うことのできないもの」である。すなわち「彼」が感じ取ったのは、意味にとらわれ「麻痺」させられた不遜な意識によつては超えることができない次元、自分自身の身体が単なるものとしてしか存在しない次元、すなわち「死」の気配であつたのではないか。

『嘔吐』のロカンタンがマロニエの木の前で「啓示」に打たれるようにして感じ取った存在の無根拠性と偶然性が、もつとも強

力に貫徹される状態として、村上春樹はそれと明示はしないながらも、確かにここで「死」を発見しているのだと言えるのである。

むすび

『回転木馬のデッド・ヒート』の「はじめに」の中で作者村上は次のように書いている。

他人の話を聞けば聞くほど、そしてその話をとおして人々の生をかいま見れば見るほど、我々はある種の無力感に捉われていくことになる。おりとはその無力感のことである。我々はどこにも行けないというのがこの無力感の本質だ。我々はいか自身をはめこむことのできる我々の人生という運行システムを所有しているが、そのシステムは同時にまた我々自身をも規定している。

「我々はどこにも行けない」というのが「人生」であり、その「運行システム」の外部に一步も出られないとするなら、人間の「生」は死と同じである。少なくともサルトルならそう考えるだろう⁽⁸⁾。「プールサイド」の「彼」が自身の身体の内部に感じ取っ

たものは、「人生」の「死」による一切の無化という「恐怖」であり、その「運行システム」の絶対的な逃れ難さから演繹される、「人生」の「デッド・ヒート」のすべてが必然的に帯びる無根拠性、言い換えれば意味の無さに他ならない。

「ハンティング・ナイフ」（八四年二月）の「彼」は自分の人生を「僕の動かない脚を中心として作動」する「システム」だと言ひ、次のように語る。

要するに我々は——僕の家族のことですが——健康な人間と不健康な人間、効率的な人間と非効率的な人間とはつきりとわかれてるんです。だからその結果として、それ以外の基準というものがどうもいまひとつ不明瞭になるきらいがあるんです。（中略）システムとしては、その機能性じたいとしては、なかなかうまくできてはいるんですがね

「彼」の不自由な脚は、「彼」の人生を規定し決定付けている。「彼」はそのことを明瞭に自覚し、自身の人生がこのシステムの外側に出ることができないことを知っている。だが、その「彼の不自由な身体の内側に潜む「彼の意志は、この状況を切り裂こうと願っている。「彼」は小説家の「僕」に「実はあなたにちよっ

と見ていただきたいナイフがあるんです」と唐突に話し始める。

僕はこれを使って他人を傷つけたり、あるいは自分を傷つけたりするつもりはまるでないんです。ただ僕はある日突然、無性にナイフというものが欲しくなったんです。どうしてだかはわかりません。

「彼」とその母親は、健康な人間が不健康な人間を養うというこの家族のシステムの中で、指示されるとおりに「あっちに行ったりこっちに行ったり」する日々を送っているのだ。「彼」の人生を規定するこのシステムの絶対性は、「我々はどこにも行けない」という「無力感」の根源をよく表している。だが、それにもかかわらず「彼」はこの自身の人生を「ナイフ」で切り裂く欲望を抱かざるを得ないのである。この「ナイフ」がシステムを切り裂くのか、システムによって規定される自分自身を切り裂く刃になるのかはわからない。実際「彼」は作品末尾で時々見る「夢」の話を「僕」にする。それは「彼」自身の記憶に向けて突き刺された「ナイフ」の「夢」だ。

ちよっど僕の頭の内側から、記憶のやわらかな肉に向けて、

ナイフがななめに突きささっている夢です。べつに痛くはありません。ただ突きささっているだけなんです。それからい
ろんなものが消えうせていつて、あとにはナイフだけが白骨
のように残るんです。そういう夢です。

過去の「記憶」をこの「ナイフ」で突き刺すことによって、自由を奪われた自身の人生を「彼」は葬り去ろうとしているように見える。自由を奪われた人間は、『嘔吐』のロカンタンが握り締めていた小石や公園のマロニエの木の根のように、単なる即自存在と異なるところが無い。「彼」にとってシステム内で機能的に操作される人生の「記憶」は、人間の「記憶」に値しないのだ。「プールサイド」の「彼」が自身の身体に感じ取ったものも、小石やマロニエの木の根と同じ存在の即自性、すなわち対自存在としての人間の死であつたに違いない。

『回転木馬のデッド・ヒート』には、「プールサイド」や「ハ
ンティング・ナイフ」のように即自と対自の相克の中で、自身の身体や人生の即自性に突き当たり、取り戻しようのない自由の意味に届かぬ手を延ばす男たちが描かれるものがある一方で、「レ
ダーホーゼン」や「タクシーに乗った男」の女性主人公達のように、過去の「記憶」を抹消し、人生の即自性そのものと手を切る

勇気が描かれるものもある。「誰をも抜かないし、誰にも抜かれ
ない。しかしそれでも我々はそんな回転木馬の上で仮想の敵に向
けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげているように見える」と
いう「はしがき」の言葉は、人間存在が対自と即自の二重性とし
て存在しており、即自存在としての不動性（誰をも抜かないし、
誰にも抜かれない）を免れないという事実と、それにもかかわら
ず人間は対自存在として未来に向けて自由を選択することを願
い、それに伴う責任を負うという苛烈さを生き抜く他ない（仮想
の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげている）という
反面の事実とを示唆しているものと言えるだろう。

注

- (1) 村上春樹『回転木馬のデッド・ヒート』（講談社 一九八五年
一〇月）ただし、引用は講談社文庫（二〇〇四年一〇月）に拠
る。
- (2) サルトル『嘔吐』は人文書院『サルトル全集』第六巻所収のテ
キスト（白井浩司訳）が長く読まれてきた。白井のこの翻訳が
改訳されたのは一九九四年（『嘔吐』改訳新版 人文書院）であ
る。また鈴木道彦による新訳（『嘔吐』人文書院）は二〇一〇年
に刊行されている。村上春樹が読んだ『嘔吐』の翻訳は全集第
六巻の白井訳であろう。
- (3) 「ド・ロロン氏」について澤田直は「ロカンタンが研究対象と
するロルボン侯爵が何者なのかと言え、これはほかでもない

十八世紀の冒険家なのだ。(中略)そんな冒険がまだ可能だったころの冒険家である。」「(呼びかけ)の経験——サルトルのモラル論」人文書院 二〇〇二年五月)と述べる。ロカントンが自己の支えとする過去がこのような内実を伴うものであったとすれば、ロカントンにとって現在とは、未来への連続性を見いだせないものであると考えることができるだろう。

(4) 平井啓之「ランボオからサルトルへ——フランス象徴主義の問題」(講談社学術文庫 一九九四年一月)

(5) 澤田直はこの「独学者」について「彼は、百科全書的な知と、世界征服とが表裏一体であることを本能的に見抜いており(中略)知を獲得することによって、世界が征服できると思いこんでいる。発見し、記述し、分類することによって、知の帝国をつくりあげること。」(前掲書)と述べている。「嘔吐1979」の「彼」もまた、「独学者」と同様の楽天性と「野心」を持った存在である。「彼の女性関係には「独学者」が熱心に説く「ヒューマニズム」と同じいかわしきがあると見えよう。

(6) 松浪信三郎訳サルトル『存在と無——現象学的存在論の試み』(ちくま学芸文庫 二〇〇七年二月)

(7) 松浪信三郎『実存主義』(岩波新書 一九六二年六月)

(8) 「死」についてサルトルは『存在と無』の中で次のように書いている。「死は、われわれをわれわれ自身に合体させる。死の瞬間にいたって、われわれは存在する。われわれがあるところのものについて、人は真に決定をくだすことができる。もはやわれわれは、全知なるひとつの叡知がなしうる総計から、脱れられないかなる機会ももたない。また、いまわのきわの悔悟は、われわれのうえに徐々に固まり固体化してきたこの全存在を、ぐらつかせようとするあらんかぎりの努力であり、われわれがそれ

であるところのものとの連帯を断ちきろうとする最後の跳躍である。」

【付記】村上春樹「回転木馬のデッド・ヒート」からの引用は、講談社文庫版に拠った。

(ちん かしん・本学博士後期課程在学)